東海村のアーティストをご紹介するコンサートvol.4

本村出身・在住・在勤のアーティストを、シリーズで紹介するコンサートの第４弾です。今回は、本村出身の津軽三味線奏者・廣原武美さんが出演します。津軽三味線の魅力あふれる演奏のほか、お弟子さんとの合奏や出演者トーク、ピアノや和太鼓との共演をお楽しみください。

期日▼10月14日（土）
時間▼午後２時開演（午後１時30分開場）
場所▼東海文化センター
入場料▼1000円／人（高校生以下は500円／人）
※全席自由で、未就学児の入場はできません。
その他▼保育サービス（1000円／人）を希望する方は、10月７日（土）までに申し込みください。
申し込み・問い合わせ▼９月９日（土）の午前９時から、東海文化センター（☎282-8511）窓口またはプレイガイドで入場券を販売します。残券がある場合のみ、同日午後１時から電話予約を受け付けます。※プレイガイドにより発売日時が異なりますので、ご注意ください。

ふるさと歴訪 ～歴史を再発見～

結核患者が発行した『新晴嵐』

茨城大学人文社会科学部准教授
佐々木　啓

現在の茨城東病院は、戦前の１９３５（昭和10）年に設立された当時は、主に戦場などで結核を患った軍人を対象とする療養施設でした。これが戦後、占領改革を受けて一般患者を対象とする療養所へと改められ、「国立療養所村松晴嵐荘」となります。

１９４６（昭和21）年11月、この療養所の患者自治会に集った人々は、雑誌作りを始めました。敗戦直後の物資不足の中、劣悪な用紙にガリ版刷りで発行されたその雑誌は、『新晴嵐』と名付けられます。

『新晴嵐』には、自治会や療養所内外のニュースに加えて、患者たちから投稿されたエッセイや詩、俳句などが掲載されました。これらからは、敗戦直後の物資・食糧不足の下で苦しむ人々の、厳しい療養の様子を伺い知ることができます。「最近のおかずわ一体どうだろう。塩からい晴嵐汁か大根の煮付けだ。これでわ死なゝい程度にエサをあてがわれてゐるのと何等変りない」（創刊号）、「昨日まで病苦に負けずたゝかつてゐた友／その友も今日ははかない人となつてしまつた」（第５号）といったように。同年の晴嵐荘の在院受療患者数は７３４人で、死亡退院患者数は94人でした（国立療養所村松晴嵐荘『三〇周年記念業績集』）。敗戦直後は、なおも結核の有効な治療法が確立されておらず、多くの患者が亡くなった時代だったのです。

旧村松晴嵐荘（昭和30年６月撮影）

他方で、「僕たちは盲従的感謝主義から解放され生ける屍から真の人間性にめざめ、日本の結核を認識して新らしい患者らしさを自覚すべきだ」（第２号）とする文章も見られます。戦後の民主化の気運が患者たちの心を着実にとらえていた事実を伝えるものといえるでしょう。

現在『新晴嵐』（創刊号から６号まで）は国立国会図書館等のマイクロフィッシュ※で読むことができますが、原本はアメリカのメリーランド大学の「プランゲ文庫」に所蔵されています。

※マイクロフィッシュ…文献・資料等の管理に用いられる、シート状のマイクロフィルム。

広報とうかい №305 平成29年８月25日発行　▼発行 東海村（村長公室広報広聴課）
〒319-1192 那珂郡東海村東海３丁目７番１号 ☎029（282）1711 http://www.vill.tokai.ibaraki.jp

UD FONT